

## 平成 29 年度 JERT 主催「救急撮影講習会 in 東京」参加報告

東京慈恵会医科大学附属柏病院 放射線部 野坂瑠美子

平成 30 年 1 月 14 日、昭和大学旗の台キャンパスにて開催された救急撮影講習会「JERT の過去・現在・未来 ～次世代への伝承～」を受講した。

当院の救命救急センターは主に三次救急の受け入れを担っているため、緊急度の高い患者や重症患者が運ばれてくる。その中で、診療放射線技師がチーム医療の一員として貢献することは非常に重要であると考えている。私は技師 4 年目になり、特に夜間・休日に先生から「読影の補助」としての意見も求められるようになってきたが、自分の知識の浅さや技術の低さを痛感していた。そんなとき、職場の先輩から JERT の活動や講習会を教えてください、去年からこちらの講習会に参加させて頂いている。今回もその道のエキスパートからお話が聞けると知りこの日をとても楽しみにしていた。

当日は極寒の中各地から多くの人が集まり、救急医療への関心の高さを改めて感じた。午前中はチーム医療の一員として、感染対策や JCS・GCS といった救急における共通言語についての講義を受けた。私たち技師は、撮影業務において患者と接することが多いため、自身の感染や感染媒体とならないように注意する必要がある。患者のベッド付近の菌を数値として表示して頂き、手指衛生は意識的に適切なタイミングで行うことが重要であると改めて感じた。また、t-PA 静注療法の適応に NIHSS という中枢神経障害の重症度指標が用いられていることを知り、今後実際の現場で t-PA 適応患者が運ばれて来たときに確認してみようと思った。

午前の最後に、主に胸部レントゲン画像の読み方を「ABC アプローチ」に沿ってお話し頂いた。カテーテルやチューブの位置確認のポータブル撮影はよくオーダーが来るが、位置が悪いと病状がより悪化してしまう。どのように、どの位置に入っていれば適切なのかをしっかりと把握しておくことが大切である。挿管チューブにおいては、位置修正の指標として「門歯からの長さ」を利用することの危険性を検討した論文を提示して頂き、処置後の確認撮影の重要性を知ることができた。

午後のはじめは救急診療におけるポータブル撮影の条件について、アンケート調査と実際の検討を交えて講義して頂いた。「X 線 CT 撮影における標準化～GALACTIC～（改訂 2 版）：日本放射線技術学会」が発行されているが、X 線撮影における撮影技術は標準化されておらず、施設によってばらつきがある。目的が明確化されている初期診療のポータブル撮影は、科学的根拠に基づいて撮影技術を確立できる可能性を示して頂いた。この考え方を、他のモダリティについても応用していけたらと感じた。

次に、全身外傷 CT における撮影技術についてお話し頂いた。撮影パラメータの違いによっても再構成時間が異なることを知り、自分の施設でも確認してみようと思った。撮影スピードも求められる救急診療においては、時間短縮の方法についてももっと検討するべ

きであることを感じた。

続けて、急性腹症の主に大腸に重点を置いて、実際の症例を用いてレクチャーして頂いた。大腸における読み方のポイントを分かりやすく教えて頂き、先生がどのような画像を求めているのかも一緒に考えることができた。「読影の補助」を行っていく上でこのような臨床知識の重要性を改めて感じた。

最後に、JERT 代表理事の坂下先生から救急診療における画像診断の過去・現在・未来についてお話しいただいた。まだ救急医療が確立していない頃、CT 撮影や Angio 撮影の条件の検討が十分でなく、現在私たちが一般的に検査できているのも、先代の技師さんたちの努力や経験があってこそものなのだなと感じた。また、救急医との繋がりも重要で、私ももっと積極的に先生とコミュニケーションを取っていこうと思った。そして、救急診療においてより安全に安定した医療を提供するためにも、今後、「救急撮影認定技師」の資格を取得して貢献したい。

最後に、このような貴重な講習会を開催して頂き、運営スタッフの皆様ならびに講師の方々に心より感謝申し上げます。

平成 30 年 1 月 吉日

